

存在と愛

市 瀬 晶 子

私は3人きょうだいの「長女」である。妹とは7つ離れており、妹がまだ赤ちゃんのとき、布おむつを洗ったり、遊びに行くときにもおぶって子守をしたことははっきり覚えている。私の「姉」意識は強く、今でもつい妹を子ども扱いして怒られることが多い。そのため、聖書のマルタとマリアの姉妹の話を聞いたり、読んだりするとき、私はいつもマルタの姿が自分のことのように思える。

ルカの福音書にはこのような話がある。「一行が歩いていくうち、イエスはある村にお入りになった。すると、マルタという女が、イエスを家に迎え入れた。彼女にはマリアという姉妹がいた。マリアは主の足もとに座って、その話に聞き入っていた。マルタは、いろいろのもてなしのためせわしく立ち働いていたが、そばに近寄って言った。主よ、わたしの姉妹はわたしだけにもてなしをさせていますが、何ともお思いになりませんか。手伝ってくれるようにおっしゃってください。主はお答えになった。『マルタ、マルタ、あなたは多くのことに思い悩み、心を乱している。しかし、必要なことはただ一つだけである。マリアは良い方を選んだ。それを取り上げてはならない。』(ルカによる福音書10章38節から42節)

ここに出てくる二人の姉妹の姿は対照的である。マルタはイエスとその一行をもてなすためにせわしく立ち働いている。一方、マリアはイエスが来られたというので、イエスの足もとに座って、イエスの言葉に聞き入っていた。そんなマリアにマルタは「なぜあんただけ座りこんでいるのか」とイライラしていたに違いない。二人の姉妹の姿は、存在“being”と行動“doing”という私たちの二つのありかたを象徴しているように思える。「存在そのもの」で居られる「私たちのありかた」と「せわしく立ち働き、何かを“する”ことで私のことを認めて欲しい」という私たちのありかたである。

社会にあっては、私たちは何かを“する”ことで自分の存在価値を証明するように迫られる。就職活動では「なぜあなたの会社に私が必要なのか、私には何ができるのか」自己PRができなければならない。しかし、「あれをしなければ、これをしなければ」と多くを思い悩み、心を乱しているマルタにイエスは「必要なことはただ一つだけ」であり、マリアは良い方を選んだと教えた。競争社会にあって私たちには「何かをしなければ、認められないのではないか、受け入れられないのではないか」という心配は尽きない。しかし、必要なことは一つだけであり、「存在そのもの」が愛されていることを見失わないで欲しいと思う。

(人間福祉学部助教)